

五月雨

樋口一葉

(一)

池に咲く菖蒲かきつばたの鏡に映る花二本ゆかりの色の薄むらさきか濃むらさきか濃むらさきならぬ白元結きつて放せし文金の高髻も好みは同じ丈長の櫻もやう淡泊として色を含む姿に高下なく心に隔てなく墻にせめぐ同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水と魚の君さま無くは我れは何とせんイヤ汝こそは大事なれと頼みにしつ頼まれつ松の梢の藤の花房かゝる主從中またと有りや梨本何某といふ富家娘に優子と呼ぶるゝ容貌よし色白の細おもてにして眉は霞の遠山がた花といはゞと比喩を引くもこちたけれど二月ばかりの薄紅梅あわ雪といふか知らねど濃からぬほどの白粉に玉虫いろの口紅を品よしと喜ぶ人ありけり十九といへど深窓の育ちは室咲きも同じこと世の風知らねど松風の響きは通ふ爪琴のしらべに長き春日を短しと暮す心は如何ばかり長閑けかるらん頃は落花の三月盡ちれば誘ふ朝あらしに庭は吹雪のしろ妙も流石に袖は寒からで蝶の羽うらの麗朗とせし雨あがり露縁先に飼猫のたま軽く抱きて首玉の絞り放し結び換ゆるものは侍女のお八重とて歳は優子に一ツ劣れど劣らず負けぬ愛敬の片鬢誰れゆゑ寄する目元のしほの莞爾として手を放しつ不圖見返りて眉を寄せしが又故にホ、と笑つて嬢さま一寸と御覽遊ばせ此マア様子の可笑しいことよと面白げに誘はれて何ぞとばかり立出づる優子お八重は何故に其様なことが可笑しいぞ私には何とも無きをと惱ましげにて子猫のチャシるは見もやらで庭を眺めて茫然たり嬢さま今日も不快御坐いますか否や左様も無けれど何うも此處がと押して見する胸の中には何がありや思ふ思ひを知られじとか詞をかへて八重やお前に問ふことがある春につきての花鳥で比べて見て何が好きぞ扱も變つたお尋ね夫は心々で御坐いませうが歸鴈が憐れに存じられます左りとして異なことぞ都の春を見捨て、行く

情なしがお前は好きか憐れといへば深山がくれの花の心が嘸かすと察しられる世にも知られず人に知られる人にも知られず咲て散るが本意であらうか同じ嵐に誘はれても思ふ人の宿に咲きて思ふ人に思はれたら散るとも怨みは有るまいもの谷間の水の便りがなくては流れて知られる頼みもなしマアどの位悲しからうと入らぬ事ながら苦勞ぞかして流石に笑へばデモ嬢さまは花の心を宜く御存じ私しが歸鴈を好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の曉月夜さては春雨の夜半の床に鳴て過ぎる聲の別れがしみぐと身にしみて悲しい様な寂しいやうな又來る秋の契りを思へば頼母しいやうにもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の事が思はれますと打しほるれば夫は道理わたしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も在世なら甘へるものをと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ぼそくも悲しくも有らうなれど及ばずながら私しは力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど歳上なれば其約束ぞ何時もく云ふことながら私しは眞實の同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あればこそ親どもばかりか私しまでめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には如何にも申されねどお前さまのお優さしさは身にしみて忘れませぬ勿躰なれど主様といふ遠慮もなく新參の身のほども忘れて云ひたいまゝの我儘ばかり兩親の傍なればとて此上は御座いませぬ左りながら悔しきは生來の鈍きゆゑ到底も御相談の相手にはなされて下さる咎もなし別ものに遊ばすと知りながらお恨みも申されぬ身の不束が恨めしう存じますとホロリとこぼす膝の露を優子不審しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔てゝ隠してをすものぞ母さまにさへ申さぬことも遂ひに話さぬ時はなき今日に限つて其やうな事いはれる覺えは何もなければマア何と思ふてぞといふ顔じつと打仰ぎて夫々それが矢ッ張りお隔て何故その様にお藏くし遊ばす兄弟と仰しやつたはお偽りか、偽りでは無けれど隠くすとは何を、デハ私しか

ら申しませう深山がくれの花のお心と云ひさして莞爾とすれば、アレ笑ふては云はぬぞよ

(11)

思ひ入る路は一ト筋なれど夏引きの手引きの糸の乱れぐるしきは戀なるかや優子元來才はじけならず柔和しけれど惻發にて物と道理あきらかに分別ながら闇らきは晴れぬ胸の雲にうつくとして日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひの無き身ならねば他人ごとなりとも悲しきを假初ならぬ三世の縁おなじ乳房の寄りし身なり山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日さへ東の方に足な向けそ受けし御恩は斯々此々母の世にては送りもあえぬに和女わすれてなるまいぞと寐もの語に云ひ聞かされ幼な心の最初より胸に刻みしお主の事ましてや續く不仕合に寄る方もなき浮草の我れ孤子の流浪の身の力と頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的には譯もあれど思ひはお主のもとへ又見出されて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さまの御慈愛山の中の峯たかきが上も高く海の中の沖深さが上も深しお可愛や誰れ人彼のやうに思しめして御苦勞やら我身新參の勝手も知らずお手もと用のみ勤めれば出入りの他人多くも見知らず想像には此人かと思ゆるも無けれど好みは人の心々何がお氣に染しやら云はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも無なるべしお慎み深さはさることなれど御病氣にでも萬一ならば取かへしとなるべきならず主は誰人えぞ知らねど此戀なんとして叶へ參らせたし嬢さまほどの御身ならば世界に苦もなく憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとては又苦の世の中やと我身に比べて最憐がり心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ染めし初花ごろも色には出じとつゝみしは和女への隔心ならず有様は

打明うちあけてと幾いくばくたびも口元くちもとまでは出しものゝ恥ちかしさにツイ云いひそゝくれぬ和女わんなはまだ昨日きのう今日けふとて見
 參まゐらせし事の無なきならんが婢女めいなんどもは蔭口えぐちにお名なは呼よばずて光氏みつぢさまといふとかやお姿すがたは察させよか
 し夫つまに引ひかれてゝは無なけれど彼の人は父様とと無な二にの御懇意ごこんいとて恥ちかしき手前てまへに薄茶うすぢや一服いちぷく參まゐらせ初はじしが
 中々ちやぢやの物思ものおもひにて帛紗ふくささばきの靜しずこゝろな成なりりぬるなり扱あつてもお姿すがたに似にぬ物がたき御氣象ごきさうとや今の代よ
 の若者わかしに珍めづらしとて父様ととのお褒ほめ遊あそばす毎まに我われことならねど面おもて赤あかみて其坐そのまにも得え堪たねど慕ほしはし
 の數かずは増まりぬ左ひだりりながら和女わんなにすら云いふは始めて云いはぬ心こころは描えかぬ畫えもおなじ事御覽ごらんじ知る筈はずもあ
 らねば萬ま一いちの頼たのみも無なきぞかし笑わらはるゝか知らねど思おもひ初はじめ最初はじめよりこの願ねがひ叶かなはずは一生いっしょう一人
 で過すぐす心憂こころうれきに送おくる月日つきひのほどに思おもひこがれて死しねばよし命いのちが若わかしも無な情づねくて如何いかんに美うるはしき
 夫人おおくたむかへ給たまひぬとも愛あいらしき兒生こごれ給たまふとも聞きく身のつらさが思おもはるゝぞとてほろゝと打泣うちなけ
 ばお八重やえかなしく身を寄よせてお前まへさまは何故なにゆゑそのやうに御心ごこころよわい事仰おほせられるぞ八重やえは元來もとより愚鈍ぐどん
 なり相談はなしてからが甲斐かひなしと思おもひしめてか馴なれぬ御使ごつかひひも一心いっしんは一心いっしん先方かたさまどの様ような御情ごじやうけ
 しらずで有あらうとも貫つらかぬといふ事ことある様ようなし何なにともしてお望のぞみ吃度くちど叶かなへさせますものを御内端おうちぢ
 すぎてのお物思ものおもひくよく斗たたかり遊あそばせばこそ昨日きのう今日は御顔ごかほ色いろもわるし御病氣おわづらひでも遊あそばしたら
 御兩親ごふたかたさまは更さらなる事ことなり申まをすも慮りよくわい外わいながら妹いもうとに思おもはせとての御慈愛ごじあいに身まは姉上あねさまをもうけし心こころお前まへさ
 ま大切たいせつなほどお案あんじ申まをさずには居ゐりませぬ忌いしや何なにごとぞ一生いっしょう一人ひとりで世よを送おくるの死しんで思おもひを遁のが
 がれたしのと着きぎつめた御心ごこころに必かならずらずお成なりり遊あそばすなと宥なだめる身みさへ眼まなこはうるみぬ、堪た忍しのせよかし
 和女わんなにまで苦くるをかけてあらぬ思おもひに心を盡つくすが我が身みながら口惜くちやくしきなり左ひだりりとても彼の人の事こと
 斷念だんねんがたきは何なにゆゑぞ云いはで止とまんの決心けつじんなりしが新設しんせつな詞ことばきくにつけて日頃ひぐらの慎しんみも失なくなりぬと
 漸やう々じやくせまりくる娘氣むすめに涙なみだに咽むせびて良時やありしが、八重やえさぞ打うちつけなと惘あきれもせんが一生いっしょうの願ねがひぞよ

此心傳へては給はるまじきや嬉しき御返事聞きたしとは努々思はねど誰れ故みじかき命ぞとも知られて果てなば本望ぞかしと打しほるれば、又しても其様なことを御前さま此々とお傳へ申さば好きお返事は知れた事なり最早よくとは思しめすな、否やくそれは八重が知らねばぞ杉原さまは其やうな柔弱な放埒なお人で無ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者と御怒りにならば何とせん、夫は餘りのお取こし苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せの有る筈なし扱も御戀人は杉原さまとやお名は何とぞ、三郎さまと申のなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一ト足違ひに御歸宅ゆゑ知らぬは道理と云ひかけてお八重の顔さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の大恩ぞかし諄うは云はぬ心は是よと合はず手に嬉しき色はあらはれたり

(三)

雲雀のあがる麥生なゝめに見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔しは何の苦が有りし野河の岸に菊の花手折とて流れ一筋かち渡しし給ふとき我はるかに歳下の身のコマシヤクレにも君さまの袂ぬれるとて袖襷かけて參らせしを如何に人にも笑はれけん思へば其頃が浦山し君さま東京へ歸給ひし後さまぐ續く不仕合に身代は亂離骨廢あるが上に二夕親引つゞきての病死といひ憂きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨空に心のしめる我れを取らへて群長の悴づらが些少の恩鼻にかけての無理難題やり返して遣りたけれど女子の身は左様もならず柳にうける宜きことにして金やらん妾になれ行々は妻にもせんと口惜しき事の限り聞くにつけても君さまのことが懐かしく或る夜にまぎれて國を出てつ漸々東京へは着きし物の當處なければ御行衛更に知るよしなく様々の憂き艱難も御目

にかゝる折の褒められ種ぐさにと且かつつは心に樂しみつゝ、賤しい仕業も身は清し行ひさへ汚がれずばと都乙女みやこおとめの錦の中へ木綿着物に菅笠すげがさ脚絆かきはづかしや女子おんな身不似合の菓くだもの賣りも一重に活計みずぎの爲のみならず便りもがな尋ねたやの一心なりしが縁えんしあやしく引く方ありて不圖呼び入れられし黒塗屏もお勝手もとに商ひせし時後あとにて聞けば御稽古がへりとや嬢さまの乗めしたる車勢ひよく御門内へ引入るゝとて出でんとする我と行違ひしが何に觸れけん我がさしたる櫛車の前にはたと落しを知らず曳しかばなど堪たまるべき微塵になりて恨みを地に殘しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給ひ此そこねたるは我身に取らせよ代りに新らしきものを取らすべしとの給ひしかど元來落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理破損そこねしとて恨みもあらず況まじてや代りをとの望みもなし是れは亡母が紀念かたみなれば人に奉るべき物ならずとて拾ひ納めて懐にせしをいとゞしく御不愼ごふびんがり扱は親も無き人か憐れのことや先庭口より我が部屋まで來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴れたれ御座敷の結構お庭のたゞづまひ華族さまにやと疑ひしは一いっに嬢さまの御言語容姿にも依りし物か其お美しくし嬢さま御親切おんせつしんにも女子おんな同志は互ひぞとて御優しき御詞我もしきりに嬉しくて尋ぬる人ありとこそ明ざゞりしが種々いろいろとの物語に和女の母御は斯々の人ならずやと思ひ寄らぬ御問ひに誠に若かぞ何として御存じと云へば忘れて成るべきか和女おんなと我れとは兄弟ぞかし我れは梨本と優なるをとて手を取りての御喜よろこびは扱は母が乳ちちを參らせたる君なりしか御目にかゝりし嬉しさに添へて落ぶれし身はづかしと打なきしに榮枯は時なるものを歎く事かは萬は我れに委まかせよかし惡るき様にはなすまじければ今日より此處に身を落つけずや母様には我れ願はんとて放し給はず夫様も又くれぐれの仰せに其まゝの御奉公都會みまごなれぬ身とて何ごとも不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古參の婢女ひめも侮らず昨日の我れ忘れし様な樂な身になりたるは嬢さまの御情け一ツなり此御恩何として送るべき彼の

君さまに廻り逢はゞ二人共々心を合せてお話相手になるべきをと何につけても忍ばるゝは又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま昨日今日のお物思ひ命にかけてお慕ひなさるゝ主はと問へば杉原三郎どのとや三輪の山本しるしは無けれど尋ぬる人ぞと知る悲しき御存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま不憫いとやと思はならねど彼の何人何としても取持たるべき受合ては立ちし物の此文には何の文言どういふ風に書いてあるにや表書きの常盤木のきみまるとは無情つれなきひとへといふ事か岩間の清水と心細げには書き給へど扱もく御手のうるはしさお姿は申すも更なり御心だてと云ひお學問と云ひ欠け處なき御方さまに思はれて嫌やとはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身として比べ物になる心はなけれど今日までの憂き苦勞は何ゆゑ逢はんと思ふ夫一ツに萬の願ひをかけ置きしに今日の前逢ふ日は切ても逢ふが悲しき事義に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を探れと仰せらるゝとも夫に違背はすまじけれど我が戀人周旋とりもたんことどう斷念あきらめてもなる事ならず御恩は御恩これは是なり寧いづそお文取次いだる体にして此まゝになすべきか否やくゝ夫にては道がたゝず實は斯々の中なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそは夫で宜けれど彼れほどまでに思しめし入れたもの左らばと云ひて斷念あきらめのつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現在にお心知りながら夫もつらし是れも憂しと迷ひに心も夕暮の空お八重つくぐ詠ながむれば明日も晴日はれひか西の方のみ紅ゐの雲たな引きぬ

(四)

男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みいろこのみの言の葉なりけん杉原三郎すぎはらさんろうと呼ぶるゝ人面ひとおもてざし清らかに舉止優雅けいからずたが目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我ゆゑに人二人まで同じ思ひにくるしむ共いぎやしら檜ひのきの若葉わかばの露つゆかぜに散る夕ぐれの散歩べつそくがてら梨本の娘病氣べいそくにて別荘べつそうに出養生でやしやうとや見舞みまひてやらんとて柴の戸おとづれしにお八重はじめて對面たいめんしたり逢はゞ云はんの千言ちごころ百言もひごころうさもつらさも胸むねに吞のみて恩おんとも言はず義理ぎりとも言はず沸かへる涙も人事にんじにして御不憫おいともしや嬢ぢやうさま此程こゝろよりのお煩わづらひひのもととは云はゞ何ゆゑならず柔和おとなしき御生質おんせいしつとて口へとは出し給はぬほど猶御なほおんいとほしお心は中々我が云ふやうな物にはあらず此お文御覽おんぶんごらんせばお分りになるべけれど御前ごぜんさまま無情つれなきお返事かへしもし遊あそばされなば彼のまゝに居給ふまじき御決心ごてんごころぞと見る目は如何につらからぬ事が久し振ふるにて御目ごめかゝりし我が身の願ねがひ是れ一ツなり叶へさせ給はゞ嬉うれしかるべきをとて取次とりつぎぐ文の思おもひ切りても涙ほろほろ膝ひざに落ちぬ義理ぎりといふもの世よに無なかりせば云ひたきこといと多し別れしよりの辛苦しんくは如何いかに或る時はあらぬ人に迫おまれて身の廻まわればの無なかりし時操ときぞらはおもし命いのちは鷲毛じゆうもうの雪ゆきの夜よに刃手やいばてに取りしことも有りけり或時はあるときはお行衛ゆくゑたづねて詫わて恨うらみは長ながし大河おほがはの水みづに沈しづむ覺悟かくごも極ごくめしかど引れし後のちる髪かみの千筋ちすぢにはあらで一筋ひとすぢに逢あふといふ日を頼たのみにして今日けふまでも過すせし身みなりと云いひたけれど嬢ぢやうさまの戀こゝろも我が戀こゝろにも淺あさ深ふかさのあるべきならず我われれまだ其事そのことを口くちにせねば入譯いりわけ御存ごぞんじなきこそ周旋しゆせんなるを他あだだとは思おもふまじ左ひだりるにても君きみさまのお心氣こころげづかはしと仰おほぎ見れば端はたなくも男おとこはじつと直視ながめるたりハツと俯うつむ向むく櫛くし紅葉もみぢのかけ美うるはしき秋あきの山里やまのに茸たけのこがりして遊あそびし昔むかししは蝶々てつてつ鬚ひげも夢ゆめとたちて姿すがたやさしき都風みやまかぜたれに劣せらん色いろなるかは愁あはれを含こめど愛あいらしき雨あめの撫なりし

ほれて床し三郎の心何と知らねど優子の文を手にとりつ浅からぬお心辱けなしと三郎喜こびしとて懷中に押し入れつゝ又こそと坐に立つに扱は嬢さまの心汲とり給ひてかと嬉しきにも心ほそく立上る男の顔そと窺ひてホロりとこぼす涙を藏くし嬢さまにも嘸ぞお喜び我身とても其通りなり御返事吃度まちますと云へば點頭ながら立出る廻り縁のきばの橋そでに薰りて何時か月に中垣のほとり吹のぼる若竹の葉風さら／＼として初ほとゝぎす待べき夜なりとやをら降たつ後姿見送る物はお八重のみならず優子も部屋障子細目に明けて云はれぬ心々を三郎一人すゞしげに行々吟ずる詩きゝたし

(五)

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入らぬものゝ又言ひ出すかと思はるゝも恥かしくじつと堪ゆる返事の安否もしやと思へば萬一やになるなり八重は大丈夫とは受合へど夫は氣やすめの詞なるべし彼の文とても御受取になりしやならずや其場でそのまゝ御突き戻しになりたるを我れに力落させまじとて八重の繕ひて居るにはあらずや否や／＼八重として其様のことある筈なし人を疑ふは罪ふかきことなり一日二日待給へ好き返事の參るは定ぞと言ひしに違ひは無かるべし若しさうならば何とせん八重は上もなき恩人なれば何ごとなり共氣に入ることとして悦ばせたと歳は下なれど分別ある人として言少なゝれば願ひは有や望みはなしや知れ難きを何とせん扱も人妻となりての心得は娘の時とは異なる物とか御氣に入らば宜けれど若し飽かれなば悲しき事よ先それよりも覺束なきは彼の文の御返事なり御覽にはなりたり共其まゝ押まろめ給ひしやら却りて御機嫌

そこねもして愛想づかしの種にもならば云はぬに増る愁らさそかし君さまこそ無情とも思ふ心に二ツは無し不孝か知らねど父様母さま何と仰せらるゝとも他處ほかの誰れを良人に持べき八重は一生良人は持たずと云ふものから我が身とは自づから異りて關係はることなく心安かるべし浦山しやと浦山るゝ我をば知らで吐息をもらしぬお八重はつくゞ有し日の事を思ふに男心の頼みがたさよと我れ周旋する身として事整ふは嬉しけれど優子どのゝ心宜く見えたり三郎喜こびしと傳へ給へとは餘りといへど昔しを忘れ給ひしお詞なりトおもふ我が身の妬みにやお主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人さへ有るを我一人にて受きをしのばゞ何處も事な納まるべきなり何氣なき嬢さまが八重や八重やと相談相手に遊ばすを御恨み申は罪のほども恐しゝ何ごとも残さず忘れてお主さまこそ二代の御恩なれ杉原三郎といふお人元來のお知人にもあらず況てや契りし事も何もなし昨日今日逢しばかり若かもお主さまの戀人に未練のつながらる筈はなし御縁首尾よく整のへて睦ましく暮し給ふを見るが切めての樂しみなり我れは望みとて無き身なれば生涯この家に御奉公して御二夕方さま朝夕の御世話さては嬰子さま生まれ給ひての御抱き守り何にもあれ心を責めて仕へんか夫は何としてもなる事ならず兎ても角ても憂き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさば宜かるべけれど夫すら彼の人見捨てゝは入り難かるべしとてつくゞと打歎けど人に見すべき涙ならねば作り笑顔の片頬さびしく物案じの主慰めながら我れ先づ乱るゝ尊の戀はくるしき物なるにや成るとは見えて覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまはお廿四とやお歳よりは老けて見え給ふなり和女は何と思ふぞとて臆氣なこと云ふて見る心や流石に通じけんお八重一日莞爾やかにお嬢さまお喜び遊ばすあり當てゝ御覽じると久し振りの戯れ言ざりとは餘りに廣すぎて取り處が分らぬなりと微笑ば左らば端を少し聞かし參らせんお前さま何より何よりお嬉しと思しめす事が有べし夫なりと

て容易は言ひもせず夫ぞとは知れど猶も知らぬ顔に八重が例に似ぬことよ先づ云ふて聞かしても宜さそうなど打怨ずれば其やうに御いそぎなされますなど打笑ひながら彼の君より御返事が参りしなり是がお嬉しからぬ事かと囁かれて耳の根くわつと熱くなりつ胸とゞろかれて囁む袖の下に密と置く藻しほぐき俄には手にも取らぬをお八重察して進めつゝ取まかなひて封を切らすに文にはあらで一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな

みるべきものを空の月かげ

意味の存する處何方ぞやと茫として闇きわか葉のかげいとゞ迷ひは茂り逢ふばかり晴るゝよし無き空の月の心々に判じて見れど何れ眞意と得ぞわき難く喜こぶべきか歎くべきかお八重はお八重優子は優子斯く云はれなが斯くせんの決心互に堅けれど思ひの外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つなために飽かねど吐息されて八重はマア何と思ふぞ人の詞を待て見るあな覺束なの三十一文字や

(六)

怪しや三郎の便りふつと聞えず成りぬ待つには一日も侘しきを不審しかりし返事の後今日や來給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日憂き身につらき卯月も過たり五月雨ごろのしめり勝に軒の忍艸は我が類ひの引きては葺かねど池のあやめの根ながき思ひにかき暮らされ袖にも水かさの増さりやすらん此處は別莊の人氣も少くなく氣に入りの八重を置いては別莊守りの

夫婦のみなれど最愛の娘病氣との事なり本宅よりの使ひ絶ま無ければ事によそへて杉原のこと問は
 するに本宅かしこにも此頃さらに參り給はずといふ左るにても何とし給ひしにや我心をさなくて卒爾つとつに文
 など參らせたるを如何に厭はしと思しながら返しせざらんも情けなしとて彼れあよりは夫となく御出
 のなきか此頃のお歌の心は如何に茂るわか葉の今こそは闇られれど時節を待たば空の月の逢みるべ
 きぞとならば嬉しけれど若しやの願ひに左様見ゆるにや寧いづそ愁つらからば一筋ならで頼みのある丈だけ
 どはるゝなり扱もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處へこそ御入おい來いでなく共本宅へまで
 御疎そ遠んとは不審いぶかしゝ夫ほどまでに御嫌ひになるほどなら優しげな御詞なぞ仰せおかれけん八重が思
 ふも恥かしきまで彼の時は嬉しかりしを此まゝに見返りもし給はずは今さら面ても向けがたし悲し
 き事よと娘氣むすめぎに頼みをかけて見つ又ときつ思案にもつゝ、擦糸よらいとの八重が歎きは又異なり茂る若葉の
 妨げと仰せられしは我が事ならずや闇き迷ひと歎じ給へど夫れ悟りたればこそその御取持ちなれ思ひ
 合ふ中のお兩方ふたかたに我が生涯の望みも頼みも御譲り申して思ひ置くこと些いさ少かなきを何はゞかりての御
 遠慮とんりょぞや身をくみん觀かんずればお恨みも未練も何もあらずお二夕方さま首尾しびとゝのひし曉には潔かく斯かう々かう
 て流石は貞操めいそうを立るとだけ君さまに知られなば夫で思おもひの我れなるに此身ある故に嬢さまの戀叶は
 ずとせば何とせん身退みひぞくは知らぬならねど義理ゆゑ斯くと御存おんぞんじにならば御情おなさけぶかき御心として
 人は兎もあれ我よくばと仰せらるゝ物でなし左らでも御弱おんじやくきお生質なまぢなるに如何いかにつきつめた御覺悟を
 も遊ばすまじき物ならず御最愛のお一人ひとりご娘むすめとて八重や何分たのむぞと嚴格むつがしい大旦那さまさへ我身風
 情に仰せらるゝは御大事さのあまりなるべし彼につけ是につけ氣づかはしきは彼の人の事よ有りし
 日の對面の時此處に居給ふとは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦しんくさこそなるべけれど奉公
 大切だいじに勉め給へと仰せられしが耳の残りて忘られぬなり彼れあほどにお優しからず是れほどまでも

歎かじと斷ち難き絆つらしとて人見ぬ暇には部屋のうち伏し沈みぬ何れ劣らぬ双美人に慕はるゝ
 身嬉しかるべきを何を厭ふてか三郎かき絶て影も見せず疑念は重なる五月雨のくも、薄らぐべき由
 もなくて、世をうみ梅實の落る音、そゞろ淋しき日を幾日、をぐらき窓のあけくれに、をち返りな
 く山時鳥の、から紅るにはふり出でねど、涙に袖の色かはるまで同じ歎きを別に知る主従の思ひさ
 ても果敢なし優子はいとゞ世を知らぬ身のお八重が素振り得も察せず氣の毒や我身大事にかけると
 て瘦せ見ゆるほど心配させし和女の情は忘れぬなり左りながら如何ほど盡くしてくるゝ共なるまじ
 き願ひとぞは漸々に斷念たり夫につきて又別に父様母さまへの御願ひあれど御二夕方なり和女なり
 に歎きをかくるが愁らきぞとてしみぐゝと物語りつお八重の膝に身をなげ伏して隠くしもやらぬ口
 説きごとにお八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよゝと泣きしがお前さまに其やうな御覺悟させま
 すほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは不審しけれど無情き御返事といふにもあらぬを早
 まつての御考へは御前さまの様に無し今しばしの御辛抱ぞ其うちには何ともして吃度お喜こばせ
 申べし八重が一心を憐れとも思しめして其やうな悲しいことをお聞かせ遊ばすなとて力を添へぬ優
 子嬉しく手に手を取りて前の世では何でありしやら兄弟にもなき親切この後とも頼むぞやはよりは
 別しての事何ごとも汝の異見に隨はん最早今のやうな事云ふまじければ免してよと詫らるゝも勿
 体なく待てば甘露と申ますぞやと輕るげに云へど義理は重し袖に晴れ間は見えぬ物の限りあればに
 や今日珍づらしく鳶なきて雨の餘波に軒ばの露に照る日あたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地
 よげなるを籠居てのみ居給ふは御躰にも毒なる物をとお八重さまぐゝに誘ひて邊りちかき野の景色
 田面の庵の侘たるも又をかしかるべし御覽ぜずやとわりなくすゝめて柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ
 人の心のうやむやは知らずや茂る木立すゞしく袖に茸く風むねに欲しゝ植はたす小田の早苗青々

として處々に鳴き立つ蛙の聲さまぐなる彼れも歌かや可笑しとてホ、と笑む主に我れも嬉しく
彼方の萱ぶき此の垣根お庭の中に欲しきやうなり彼の花は何ならんと小走りして進み寄りつ一枝手
折りて一輪は主一輪は我れかざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらず畔道づたひ行返りて遊
ぶ共なく暮す日の鳥も寐に歸る夕べの空に行く雲水の僧一人たゞく月下の門は何方ぞ浦山しの身の
上やと見送くれれば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくヲ、と叫びぬ